


第3回 未来につなげる少子化対策調査事業 研究会



幼児教育・保育の視点から見る 少子化対策の重要性

宮崎国際大学・宮崎学園短期大学

幼児教育・保育センター

宮崎学園短期大学保育科 講師

小川 美由紀

自己紹介

- 1979年 宮崎県宮崎市生まれ（宮崎市内在住）
幼稚園～小学4年生まで、佐土原町→国富町→椎葉村で過ごす
- 2002年 宮崎大学教育学部を卒業
約15年間、宮崎市内の保育園に保育士として勤務
- 2013年 結婚・第1子を出産
- 2015年 第2子を出産
- 2016～2019年 宮崎学園短期大学附属みどり幼稚園に保育教諭として勤務
在職中に第3子を出産（2018年）
- 2019年～ 宮崎学園短期大学保育科・講師として保育者養成に従事
※担当科目は「乳児保育(3歳未満児の保育)」と「保育実習」
- 2022年～ 宮崎学園短期大学附属みどり幼稚園・清武みどり幼稚園の
こども園保育アドバイザーを兼務

家族構成・趣味など

- ◆ 3姉妹の母親（小4・小2・年中）※絶賛、子育て中！
- ◆ 主人と子どもたち、実母(60代後半)で生活 ※フルタイムで働けることに感謝
- ◆ 好きなこと&得意なことは、うたうこと、編み物、手話、ドラム演奏！

主な研究分野・研究内容

21世紀型の幼児教育・保育の導入と実践

- ・ 子どもの主体性を尊重するための保育内容の再考、保育環境の再構築に向けた附属園との共同研究（子ども主体の保育実践、育児担当保育、異年齢保育）
- ・ 〔保育科〕 保育科教育課程見直しプロジェクト
- ・ 〔幼児教育・保育センター〕 ※宮崎国際大学・宮崎学園短期大学共同運営
 - ①宮崎県内の幼稚園・保育所・認定こども園に向けた、最新の保育学および保育者養成に関する知見の情報発信、講演会や公開講座の企画・運営
 - ②地域の子育て支援の拠点として、親子で楽しめるイベントやコンサートの企画・運営

【学術論文】

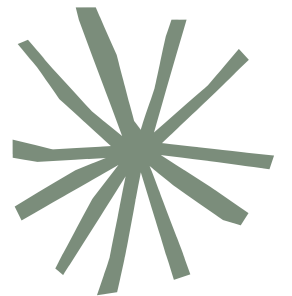
- 小川美由紀・久松尚美・小澤拓大（2022）「『保育所見学学内実習』の実践と学び2」．宮崎学園短期大学紀要，第14号，84-96
- 小澤拓大・小川美由紀（2022）「多感覚を使った音遊びと子どもの発達」．宮崎学園短期大学紀要，第14号
- 武村順子・桑迫信子・小川美由紀（2022）「保育専攻学生の乳幼児期口腔ケア教育についての考察－短期大学生アンケート調査を基に－」．宮崎学園短期大学紀要，第14号
- 小澤拓大・小川美由紀（2023）「保育観の違いへの対処と保育者の省察および職務満足感の関連－心理的安全性からの検討－」．日本家政学会誌，Vol.74 No.4 169-178

【学会発表】

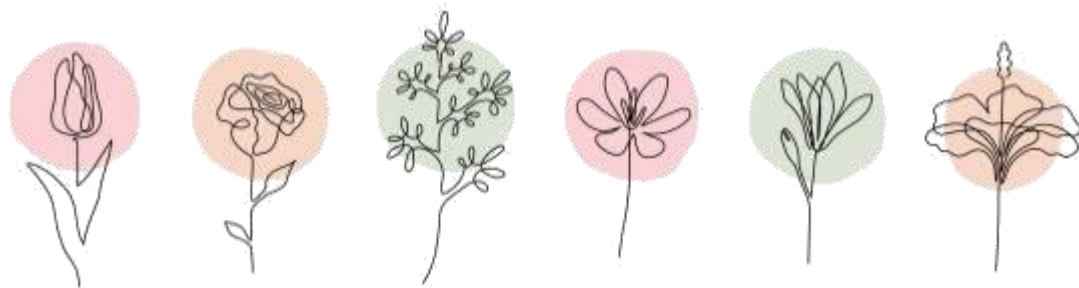
- 久松尚美・小川美由紀・小澤拓大（2019）「保育実習指導の充実に向けて2」日本保育者養成教育学会第4回研究大会抄録，107.
- 小川美由紀・久松尚美・小澤拓大（2022）「保育現場との協働による「保育所見学学内実習」の効果検証」．日本保育者養成教育学会第6回研究大会抄録，p105.
- 山下恵子・守川美輪・大坪祥子・小川美由紀・山下愛実・難波れい子（2022）保育者養成校と保育現場をつなぐ“こども理解プロジェクトMIYAGAKU”Ⅰ～子どもの姿から導かれたネットワーク～（日本保育学会第75回大会 自主シンポジウム）
- 小川美由紀・中武亮子・後藤祐子・小澤拓大（2022）乳児保育における「音遊び」の可能性－養護的視点と音遊び－（日本保育学会第75回大会 口頭発表）
- 山下恵子・守川美輪・大坪祥子・小川美由紀・山下愛実・難波れい子（2022）保育者養成校と保育現場をつなぐ“こども理解プロジェクトMIYAGAKU”Ⅱ～つながりから生まれたもの～（日本保育学会第76回大会 自主シンポジウム）

本日の発表内容

1. 21世紀型の幼児教育・保育
2. 現場から見た現状と課題
3. 幸福感の連鎖がもたらす好事例
4. まとめ

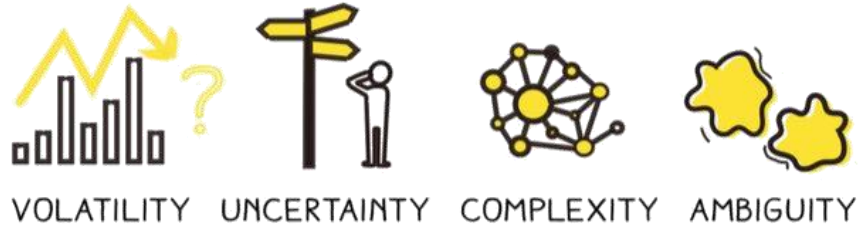


1. 21世紀型の幼児教育・保育



なぜ今、幼児教育・保育の転換期を迎えているのか

VUCA



Volatility (ボラティリティ：変動性)

Uncertainty (アンサートウンティ：不確実性)

Complexity (コムプレクシティ：複雑性)

Ambiguity (アムビグイティ：曖昧性)

- VUCAの時代が到来し、将来の予測が非常に困難になってきている。
- 今後ますます、変動的で不確実で複雑で曖昧となる時代を生き抜いていくことになる子どもたちに「必要とされる力」とは何なのかを、考えなおす時がきている。

中央教育審議会(答申) 令和 3年 1月 26日

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

～全ての子供たちの可能性を引き出す、**個別最適な学び**と、**協働的な学び**の実現～

2. 日本型学校教育の成り立ちと成果，直面する課題と新たな動きについて

(3) 変化する社会の中で我が国の学校教育が直面している課題

① 社会構造の変化と日本型学校教育

○ 我が国の教師は、子供たちの主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「正解(知識)の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある。

(4) 新たな動き

① 新学習指導要領の全面実施 (2020年度～)

○ 社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきたという時代背景を踏まえた上で、新しい学習指導要領では資質・能力を「**知識及び技能**」，「**思考力，判断力，表現力等**」，「**学びに向かう力，人間性等**」の**3つの柱**に整理した上で，…〈中略〉…学習の効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント」の確立を図ることとしている。

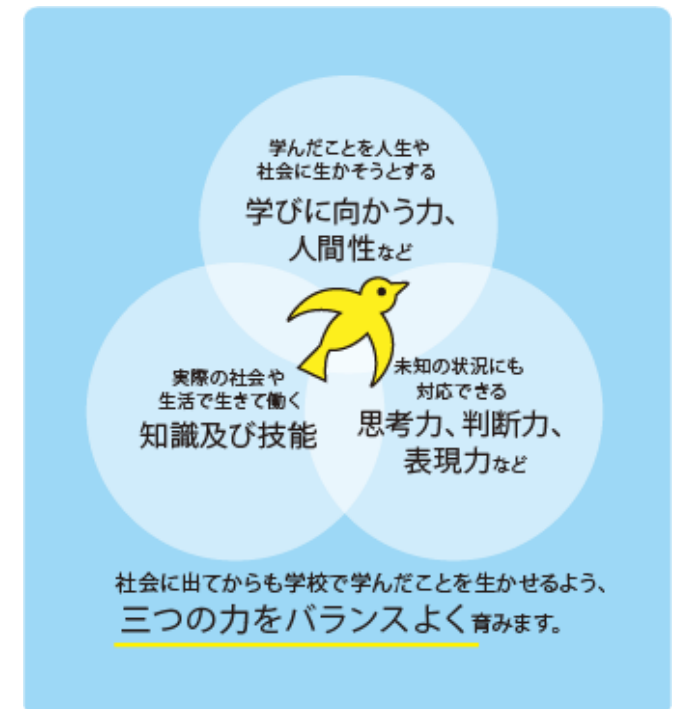
また，各教科等の指導に当たっては，資質・能力が偏りなく育成されるよう，児童生徒の「**主体的・対話的で深い学び**」の**実現**に向けた授業改善を行うこととしている。

* 幼児教育において育みたい **3つの資質・能力**

「**知識・技能の基礎**」

「**思考力・判断力・表現力等の基礎**」

「**学びに向かう力・人間性等**」



(資料) 文部科学省「平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介」

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

- …従来の社会構造の中で行われてきた「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却し、本来の日本型学校教育の持つ、授業において子供たちの思考を深める「発問」を重視してきたことや、子供一人一人の多様性と向き合いながら一つのチーム（目標を共有し活動を共に行う集団）としての学びに高めていく、という強みを最大限に生かしていくことが重要である。
- 誰一人取り残すことのない、持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現に向け、学習指導要領前文において「持続可能な社会の創り手」を求める我が国を含めた世界全体で、**SDGs（持続可能な開発目標）**に取り組んでいる中で、ツールとしてのICTを基盤としつつ、日本型学校教育を発展させ、2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」と名付け、まずその姿を以下のとおり描くことで、目指すべき方向性を社会と共有することとしたい。
- したがって、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」とする。

幼児教育・保育の基本

乳幼児期の教育及び保育は、子どもの健全な心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、（略）乳幼児期全体を通して、その特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、**環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域での生活を含めた園児の生活が豊かなものとなるように努めなければならない。**

このため保育教諭等は、園児との信頼関係を十分に築き、園児が自ら安心して**身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、**その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するように努めるものとする。（略）

- 乳幼児期は**自分の生活を離れて知識や技能を一方向的に教えられて身に付けていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、**この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが次第に培われる時期であることが知られている。
- 教育課程その他の教育及び保育の内容に基づいた**計画的な環境をつくり出し、**幼児期の教育における**見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって園児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、**望ましい方向に向かって園児の発達を促すようにすること、すなわち**「環境を通して行う教育及び保育」が基本となる**のである。

環境を通して行う教育及び保育 ～保育における3つの環境～



物的環境

自然物、人工物、場

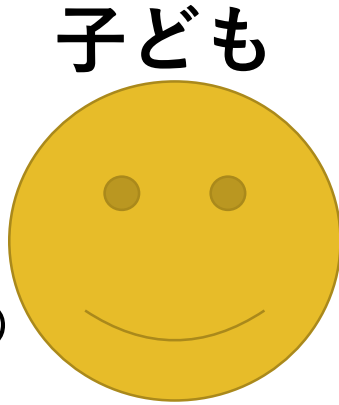
* 直接触れて操作できるもの



コト的環境

子どもが体験する出来事

- * 家族や園での生活や遊びのなかで出会う出来事
- * 自然現象や社会の事象
- * 行事、文化・風習



子ども



人的環境

保育者、クラスの仲間・友だち
子どもにかかわる職員すべて



- 今を生きる子どもたちが、今後ますます変動的で不確実で複雑で曖昧となる21世紀を生き抜いていくためには、**自ら課題を見つけ、それを解決する力の育成が重要**となる。
- そのためには、乳幼児期からの育ちにおいて、**他者と協働し、自ら考え抜く“学びの場”を保障することが必要**である。
- その“学びの場”というのは、**幼児教育・保育における「ひと・もの・こと」の環境**である。
- 子どもが自ら興味・関心をもち、考えたり、試したり、表現したりすることを**“あそびながら学ぶ”**ということが、**「子どもが主体となる保育」の基本的な考え方**である。
- 今後の幼児教育・保育において重要となるのは、**「昭和型の幼児教育・保育」からの脱却と「21世紀型の幼児教育・保育」の推進**である。

21世紀型の幼児教育・保育で大切にしたいこと

①肯定的な子ども理解

- 子どもが自分の思いや気持ちを安心して表出し、大人に共感してもらうことで、**「自分は大切にされている存在」**であることを感じられる

②子どもの人権の尊重

- 子どもの“悪いところ・できないところ”を捉え、「あなたは〇〇よね」「□ちゃんって、こんな子だよね」と、簡単にラベル付けをするのではなく、一人ひとりの子どもの**“よさ”**や**“素敵なおところ”**を認め、**子ども一人ひとりのことを受容的・肯定的に深く理解**する

③子どもとの対話

- 子どもと対話し、大人がしっかりと子どもの声を聴くということは、子どもにとって**“自分の意見や主張が認められ、社会に活かされていく”**という**ことの経験**でもある

妊娠・出産



子育て



おとな

出逢い・結婚

学生

高校生

中学生

乳幼児期

小学生

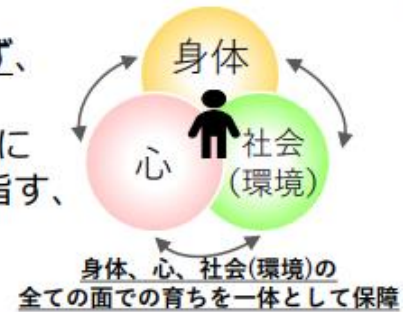
宮崎県内の幼児教育・保育のさらなる質の向上を目指すことが、宮崎県内の子ども・大人の自己肯定感を高めることに繋がり、**少子化対策の最前線**となる

「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針」に関する有識者懇談会 報告 ～基本的な指針（仮称）の策定に向けた論点整理～（概要案）

こどもの誕生前から幼児期までの育ちの環境は多様であるが、こどもの生涯にわたる幸福（Well-being）の基礎を培い、**人生の確かなスタートを切るための最も重要な時期。**
だからこそ、指針を、**こどもと日常的には関わる機会がない人も含む全ての人**と共有し、こども本人と社会全体の双方にとって重要なこどもの誕生前から幼児期までの育ちをひとしく保障することで、全ての人々の利益につなげていく。

指針の目的

こども基本法の目的・理念に則り、こどもの**心身の状況、置かれている環境等にかかわらず**、
こどもの誕生前から幼児期までを**切れ目なく**、
こどもの心身の健やかな育ちを保障し、こどもの育ちを支える社会(環境)を構築するために
全ての人で共有したい基本的な考え方と、その取組の指針を示すことで、こども基本法の目指す、
次代の社会を担う**全てのこどもが、その権利が守られ、将来にわたって幸福（Well-being）な生活を送ることができる社会の実現**を目的とする。



全ての人で共有したい理念

全てのこどもが一人一人個人として、その多様性が尊重され、差別されず、権利が保障されている

全てのこどもが、生まれながらに権利を持っている存在として、いかなる理由でも不当な差別的取扱いを受けることがなく、一人一人の多様性が尊重されている。

こどもの声（思いや願い）が聴かれ、受け止められ、主体性が大事にされている

乳幼児期のこどもの意思は多様な形で表れる。こどもの年齢及び発達に応じて、言葉だけでなく、様々な形でこどもが発する声が聴かれ、思いや願いが受け止められ、その主体性が大事にされ、こどもの今と未来を見据え「こどもにとって最も善いことは何か」が考慮されている。

全てのこどもが安心・安全に生きることができ、育ちの質が保障されている

どんな環境に生まれ育っても、心身・社会的にどんな状況であっても、全てのこどもの生命・栄養状態を含む健康・衣食住が守られ、ひとしく健やかに育ち・育ち合い、学ぶ機会とそれらの質が保障されている。

子育てをする人がこどもの成長の喜びを実感でき、それを支える社会もこどもの誕生、成長と一緒に喜び合える

身近な保護者・養育者が安心と喜びを感じて子育てできることが、こどものより良い育ちにとって重要。保護者・養育者が、子育ての様々な状況を社会と安心して共有でき、社会に十分支えられているからこそ、こどもの誕生、成長の喜びを保護者・養育者が実感でき、社会もそれを一緒に喜び合える。

乳幼児期のこどもは

安心したい

身近な人にくっついて、繰り返し抱っこを求めたり、触れ合うことで安心できる。



満たされたい

「食べたい」「寝たい」「かまってほしい」「愛されたい」などの思いや欲求を、自分のペースやリズムに合わせて満たしてもらうことで、心地よい生活のリズムが出来てくる。



関わってみたい

こども同士や関わりの中で、様々な感情を経験しながら、人との関わり方が培われる。

多様な人や社会(環境)と関わることで、それぞれの違いや個性があることに気づく。



遊びたい

身近な環境の中、自分の興味の赴くまま夢中になって遊ぶ。

自然に触れて、体験して、絵本や地域行事などの文化に触れて感性を育んだり、食事を楽しむことなども含むあらゆる遊びを通して様々なことを学んだりしながら育つ。

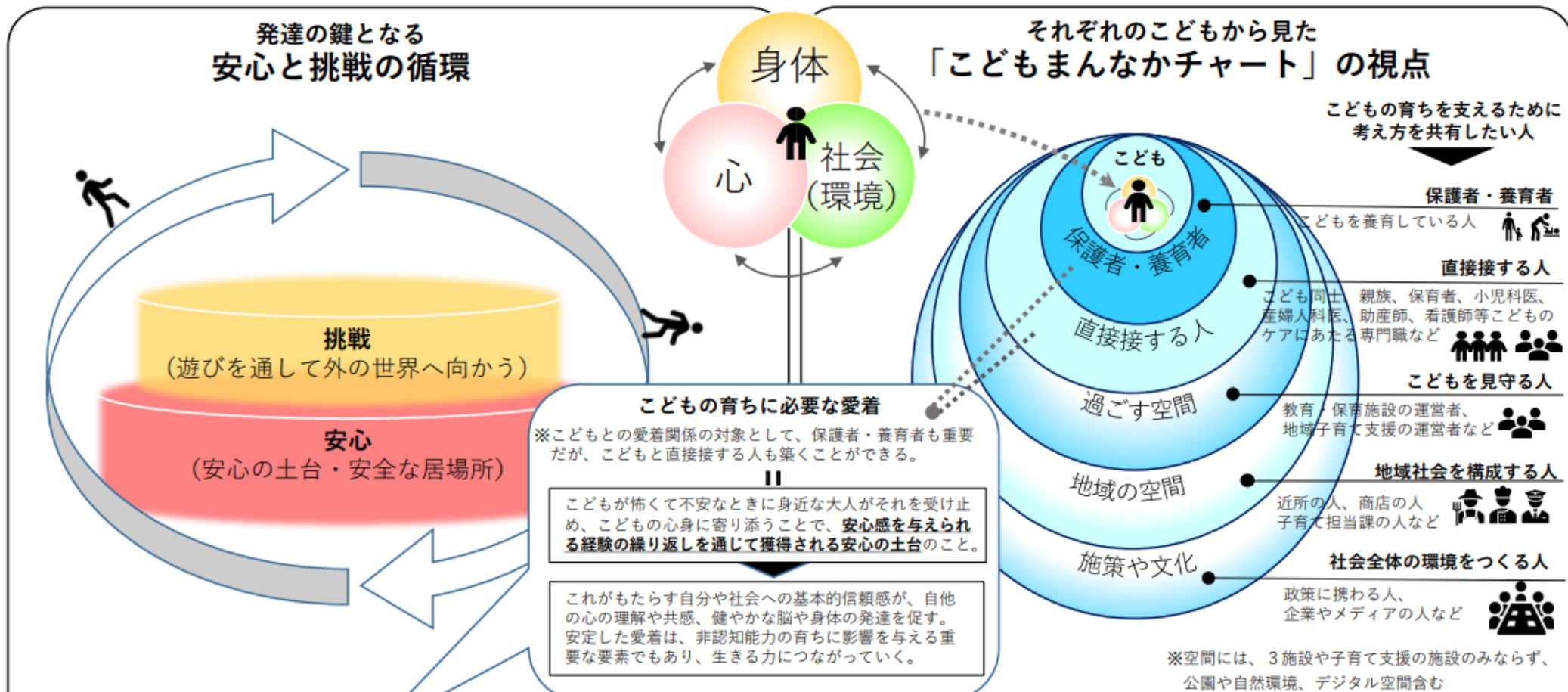
認められたい

周囲の人にありのままを受け止められ、自分の存在、意思、ペースを認めてもらうことで、自分に自信がつく。この経験から、他者への理解や優しさにつながる。

乳幼児期のこどもの育ちは、心身の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎である。

こどもの誕生前から幼児期までの「こどもの育ちの基本的な考え方」

こどもの育ちに係る他の指針等とあいまって、全てのこどもに、身体、心、社会(環境)の全ての面での育ちを一体として保障するために育ちの時期を問わず全ての人と共有したい基本的な考え方



- これまで、乳幼児期の愛着（アタッチメント）の正しい理解やその育ちのプロセスにおける重要性に関し、全ての人と分かりやすく共有できていなかった。
- 乳幼児期に**安心と挑戦の循環を保障するための考え方を、全ての人と分かりやすく共有**することで、全ての人の関わりが、より良いこどもの育ちへつながり、こどもの発達を保障していく。

- これまで、こどもを真ん中に考えたときに、直接的、間接的あるいはその両方で、こどもの誕生前から幼児期まで、全ての人が具体的にどのような立ち位置で、こどもを支える当事者となりうるのかが見える化できていなかった。
- **「こどもまんなか」視点で共有したいことを分かりやすく整理**することで、**全ての人が当事者**となり、「こどもまんなか」という**一貫した考え方**の下でこどもの育ちを保障していく。

こども家庭審議会(答申) 令和 5年 12月

今後 5 年程度を見据えたこども施策の基本的な方針と重要事項等 ～こども大綱の策定に向けて～

3 こども大綱が目指す「こどもまんなか社会」

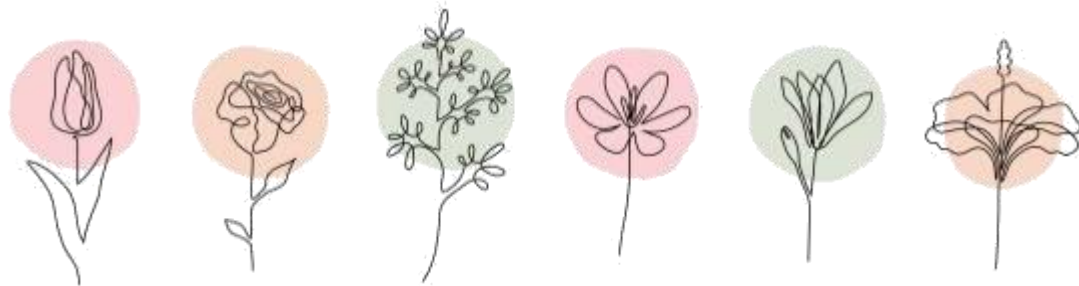
～全てのこども・若者が身体的・精神的・社会的に幸福な生活を送ることができる社会～

「こどもまんなか社会」とは、全てのこども・若者が、日本国憲法、こども基本法及びこどもの権利条約の精神にのっとり、生涯にわたる人格形成の基礎を築き、自立した個人としてひとしく健やかに成長することができ、心身の状況、置かれている環境等にかかわらず、ひとしくその権利の擁護が図られ、**身体的・精神的・社会的に将来にわたって幸せな状態（ウェルビーイング）で生活を送ることができる社会**である。

- 働くこと、また、誰かと家族になること、親になることに、夢や希望を持つことができる
- それぞれの希望に応じ、家族を持ち、こどもを産み育てることや、不安なく、こどもとの生活を始めることができる
- 社会全体から支えられ、自己肯定感を持ちながら幸せな状態で、こどもと向き合うことができ、子育てに伴う喜びを実感することができる。そうした環境の下で、こどもが幸せな状態で育つことができる

こども大綱の使命は、常にこどもや若者の最善の利益を第一に考え、こども・若者・子育て支援に関する取組・政策を我が国社会の真ん中に据え、**こどもや若者を権利の主体として認識し、こどもや若者の視点で、こどもや若者を取り巻くあらゆる環境を視野に入れ、こどもや若者の権利を保障し、誰一人取り残さず、健やかな成長を社会全体で後押しすることにより、「こどもまんなか社会」を実現**していくことである。

2. 現場から見た現状と課題



これまでの報告から見出されているキーワード

【研究会の目的】 合計特殊出生率が1.8を超えることを目指して、外部有識者を交えた研究会の開催や市町村ごとの**少子化要因の見える化**を図ることで、本県の現状分析や今後の対策を検討し、少子化対策の再構築を図る。

子ども・若者プロジェクト

(第1回 宮崎県の説明)

子育て支援

+

働き方改革

(第1回 鎌田委員のご指摘)

多様化する価値観・ライフスタイルのサポート

(第2回 藤井委員のご指摘)

地域で暮らし、働きながら、このどれもが**“希望”**で終わらず、**“実現”**に向かうために、具体的な対策が講じられることがもっとも重要である

少子化を“実感する”保育の現状

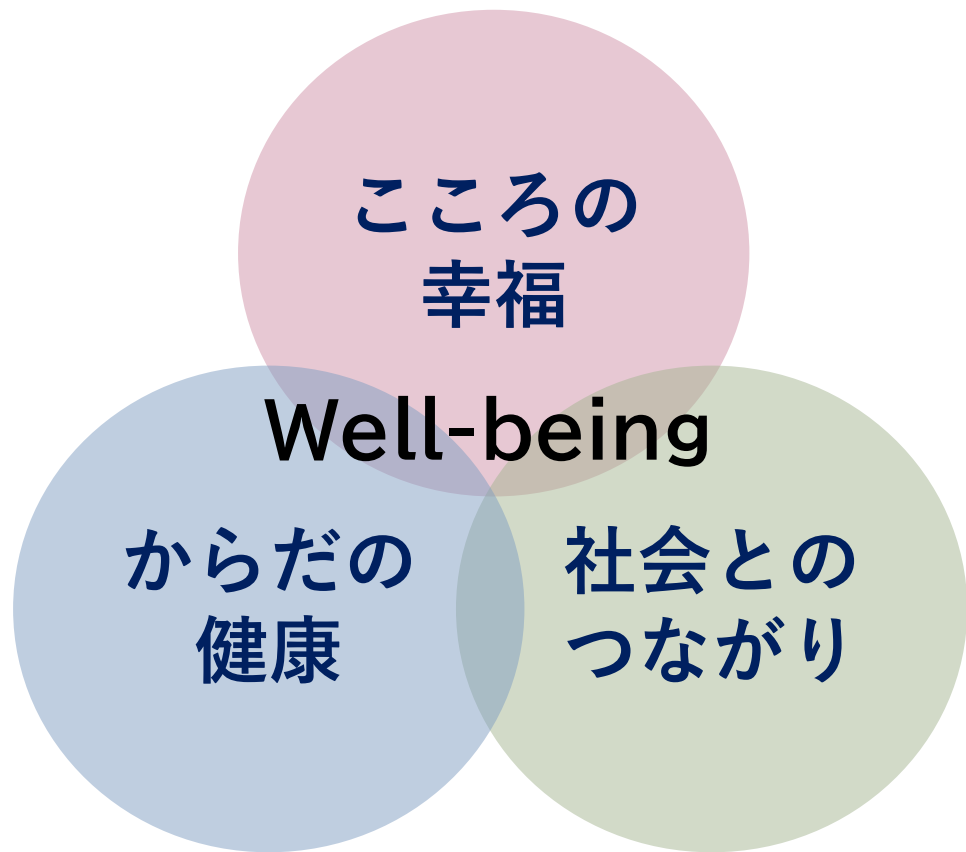
- 特に幼稚園や幼保連携型認定こども園において、満3歳児からの入園者獲得が難しい状況がある。今後の存続のためには、0歳児クラスからの入園者獲得がカギとなるが、3号認定（0歳児）の需要量の見込みも減少傾向にある。

年度	3号認定(0歳児)					3号認定(1・2歳児)					需要量 (総数) I ①+④+⑦ +⑩	供給量 (総数) II ②+⑤+⑧ +⑪	II-I ③+⑥+⑨ +⑫
	量の見込み (需要量) ⑦	確保方策(供給量)			⑨ (⑧-⑦)	量の見込み (需要量) ⑩	確保方策(供給量)			⑫ (⑪-⑩)			
		⑧(E+F)	教育保育施設 E	企業主導型保育 施設の地域枠 F			⑪(G+H)	教育保育施設 G	企業主導型保育 施設の地域枠 H				
R2	3,354	3,882	3,850	32	528	12,534	12,657	12,583	74	123	42,649	46,335	3,686
R3	3,252	3,918	3,886	32	666	12,225	12,668	12,594	74	443	41,672	46,324	4,652
R4	3,184	3,976	3,944	32	792	12,123	12,714	12,640	74	591	40,787	46,319	5,532
R5	3,107	4,031	3,999	32	924	11,830	12,699	12,625	74	869	39,874	46,379	6,505
R6	3,030	4,036	4,004	32	1,006	11,556	12,689	12,615	74	1,133	38,951	46,319	7,368

(資料) 宮崎県「第2期 みやざき子ども・子育て応援プラン」

- 県内の小規模市町村の園においては、募集停止や閉園となる可能性があるのではないか。

子どものWell-being(幸福感)に関する調査データ



- 心の安定と、体の健康と社会とのつながりが、一時的ではなく、持続的に良好な(Well)状態(being)であるかどうかが大切である

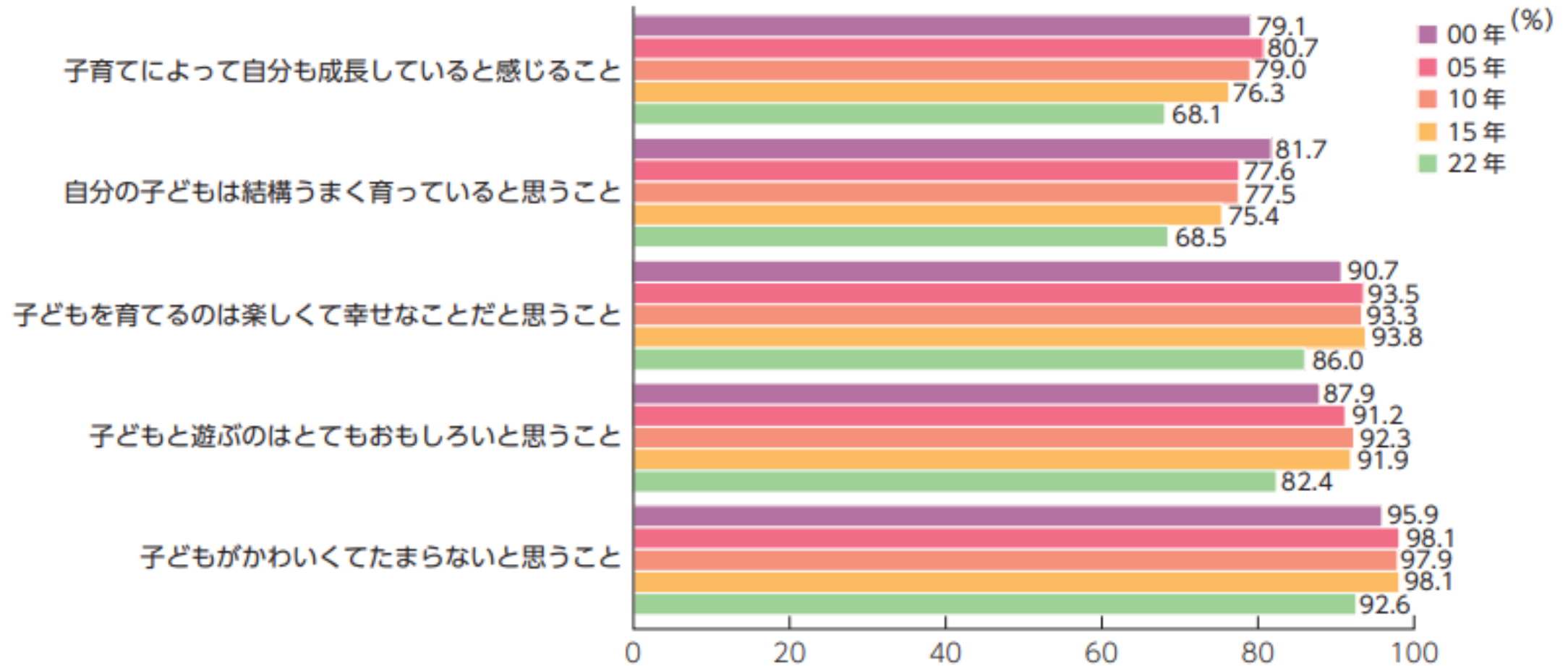
子どもの幸福度に関する国際比較

(経済協力開発機構OECD加盟38か国の順位付けより)

総合順位	国	精神的幸福度	身体的幸福度	社会的スキル
1	オランダ	1位	9位	3位
2	デンマーク	5位	4位	7位
3	ノルウェー	11位	8位	1位
4	スイス	13位	3位	12位
20	日本	37位	1位	27位
38	チリ	36位	27位	38位

(資料) ユニセフ「子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」一部改訂

子育てへの肯定的感情

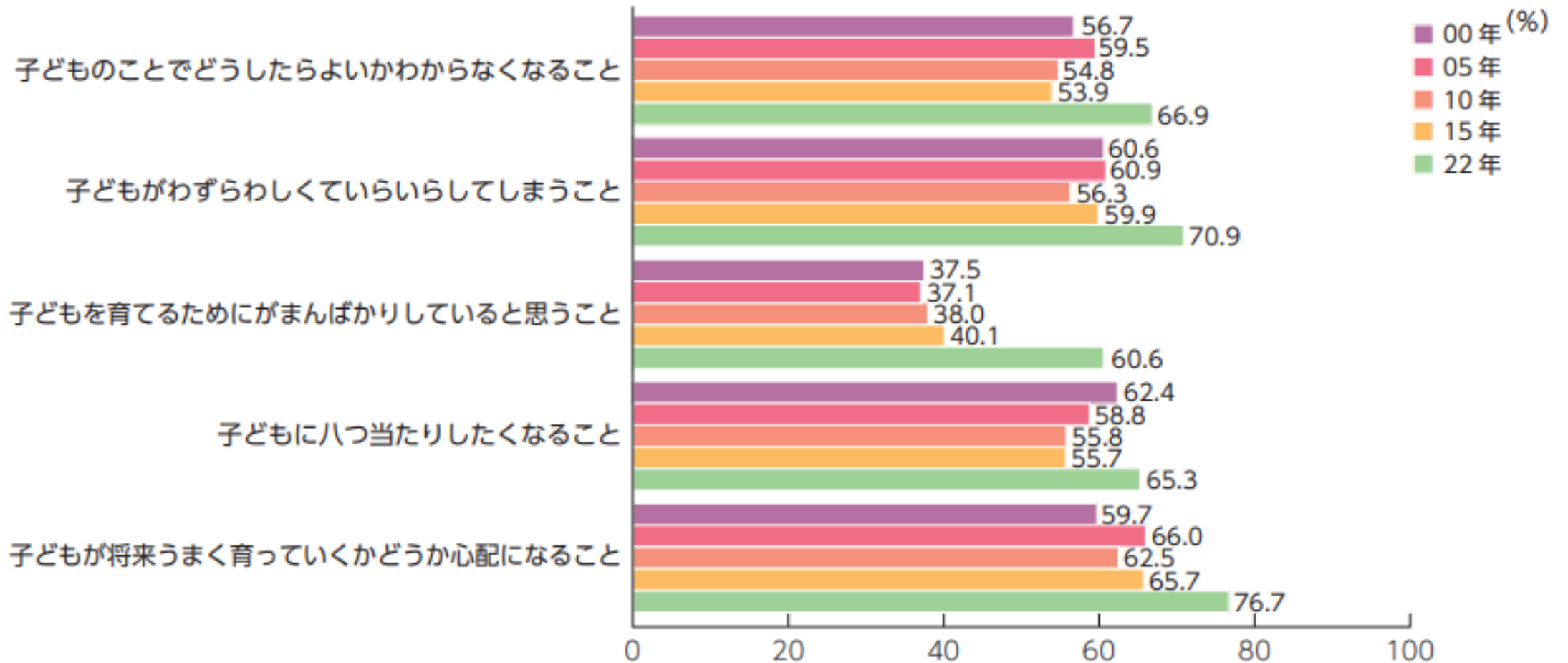


※ 「よくある+ときどきある」の%。

(資料) ベネッセ教育総合研究所「第6回 幼児の生活アンケート」

- 保護者（特に母親）の子育てへの肯定的感情は、2015年～2022年にかけて、どの項目においても著しく減少している。

子育てへの否定的感情

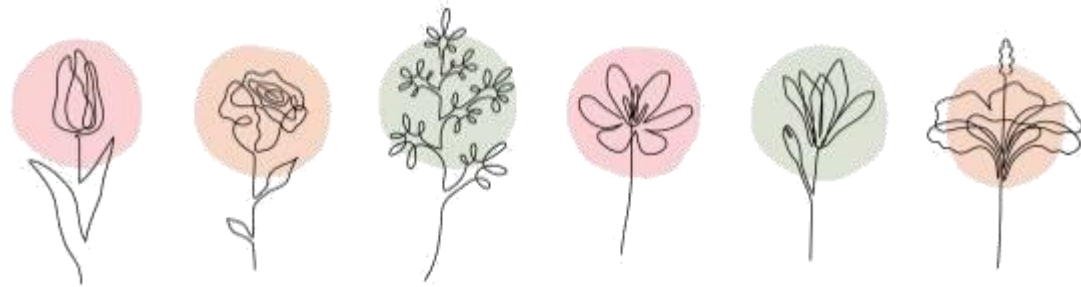


※ 「よくある+ときどきある」の%。

(資料) ベネッセ教育総合研究所「第6回 幼児の生活アンケート」

- 保護者（特に母親）の子育てへの否定的感情は、2015年～2022年にかけて、どの項目においても著しく増加している。

3. 幸福感の連鎖がもたらす好事例



ソダツバヒカリ ～ひかりの森こども園（三股町）～



こどもも、おとなも、ちいきも、まちも

ソダツバヒカリ



奇跡のような大きな成長を続ける幼児期は、一生のはじまりの大切な時期です。この時期に育んだ考える力、判断する力、そして他者をおもいやるあたたかい心は、人生を通して生きる力の土台になります。

だからこそ、あせらず、ゆっくり、じっくり。こどもたちの生まれ持った力、のびる力を信じて、見守り、ともに生き、ともに育ちあいたいと思うのです。

ソダツバヒカリが、こどもたちの大きな人生の、最初の一歩を踏み出す場でありますように。

ひかりの森こども園 園長

ソダツバヒカリ ～ひかりの森こども園（三股町）～

アソブバ

風を感じることに。
友だちと笑うことに。
冒険することに。
失敗から学ぶことに。
がんばればできる、を知ること。

幼保連携型
認定こども園

ひかりの森こども園

マナブバ

夢中になることに。
不思議に思うことに。
伝える楽しさを知ること。
主人公と一緒に冒険することに。
世界の広さに気づくことに。

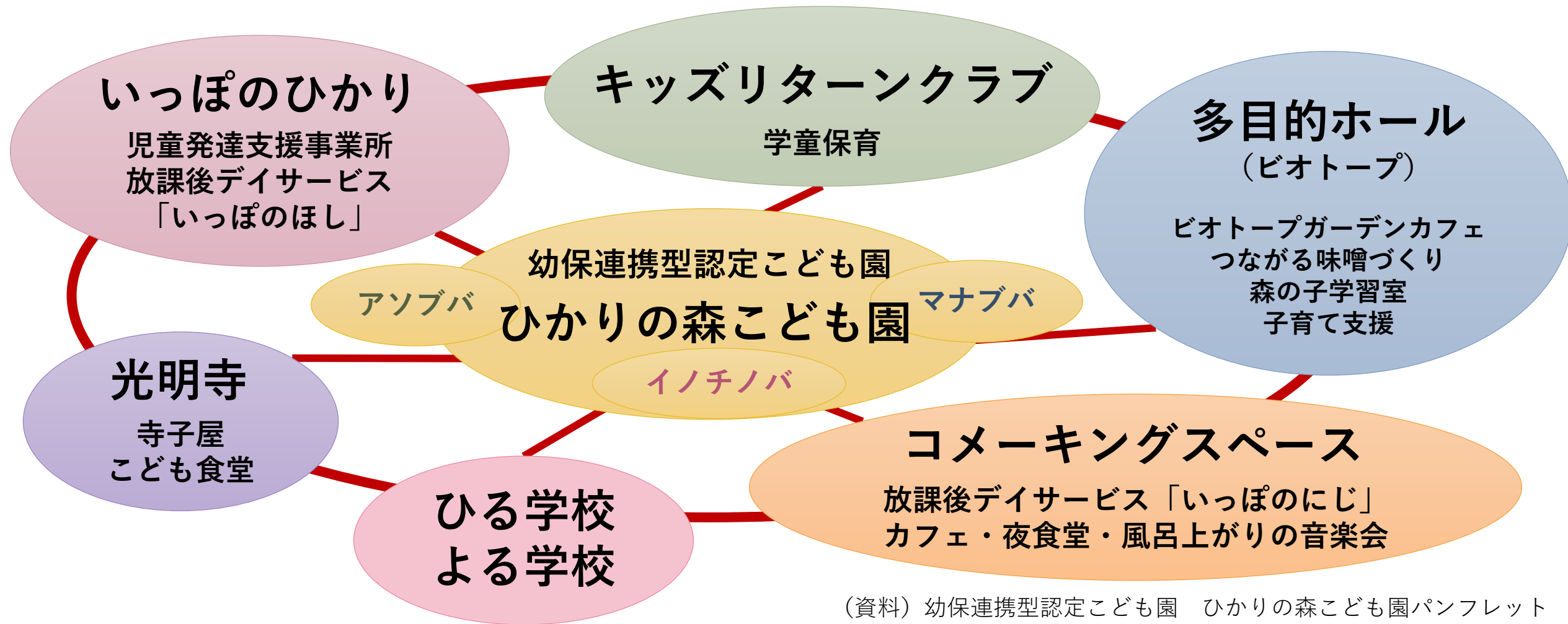
イノチノバ

生きるということ。食べ物をムダにしないこと。
人の気持ちに寄り添うこと。ありがとう、とすること。
いのちには限りがあると知ること。

（資料）幼保連携型認定こども園 ひかりの森こども園ホームページ

3つの「育つ場」からなるひかりの森こども園では、子どもと保育者が日常を豊かに暮らしながら、**子ども主体の保育実践**を行っている。

ソダツバヒカリ ～ひかりの森こども園（三股町）～



園を拠点としたコミュニティが形成され、子ども・大人・高齢者「みんなが関わり合い、学び合い、そして支え合える場所」になっている。

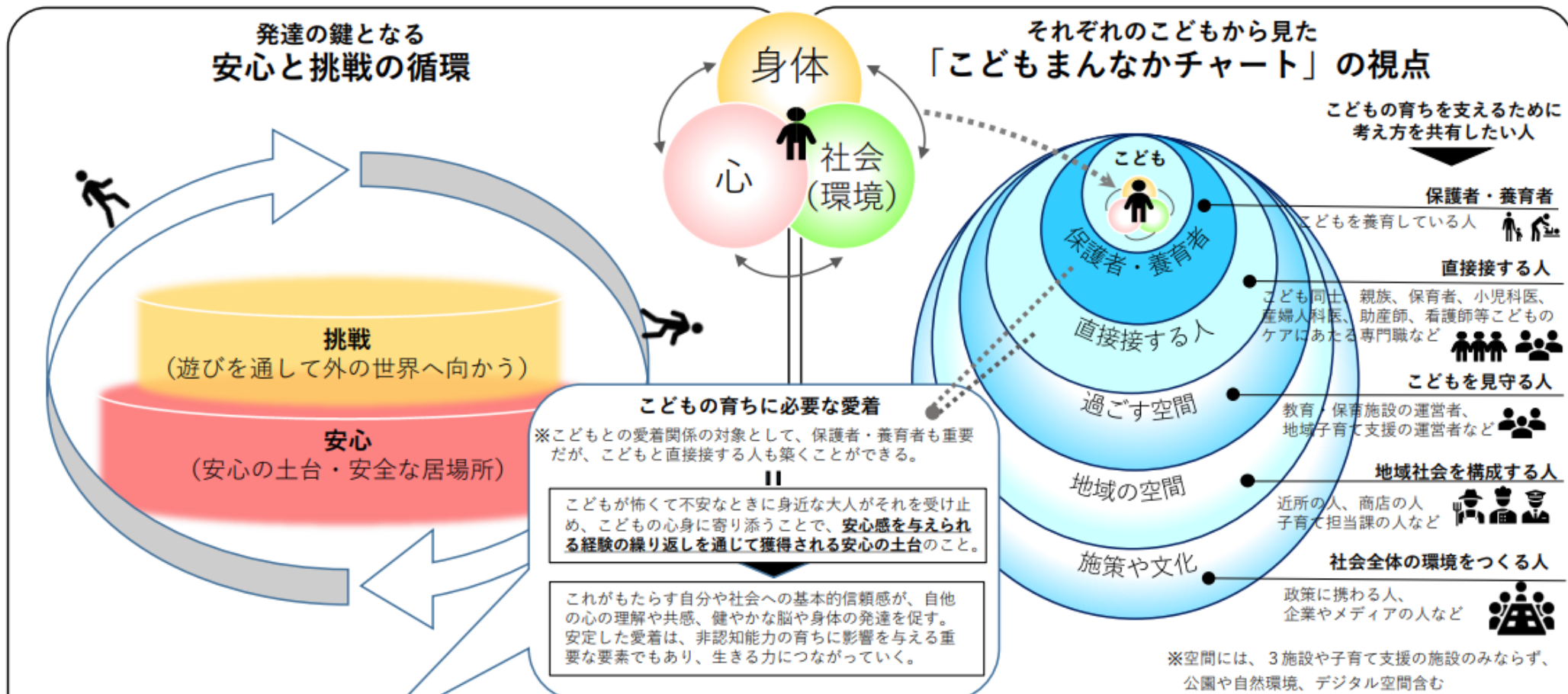
コミュニティの形成がもたらす効果

- すべての事業をこども園だけが担うのではなく、社会福祉協議会や個人事業主に場を開放し地域活動を行っていることは、主体となる団体や個人にとっての、**やりがいや幸福感**をもたらすのではないか。
- 地域の拠点となるコミュニティの存在は、そこに暮らしている若い世代が、**将来的にこの場所に住み続けたいという居心地の良さ**につながり、さらには、**安心して子どもを産み育てようという気持ちをもつこと**にもつながるのではないか。
- こども園を中心に、児童発達支援事業所や子育て支援事業所、学童保育、放課後デイサービス、不登校児の支援施設等が併設（歩いて行ける距離）にあることは、保護者の抱える子育ての悩みや困り感をすぐに相談できる場所が**“いつもそこにある”という地域の強み**になるのではないか。

コミュニティが形成されることで、**子育てへの肯定的感情の増加**につながり、**子ども・保護者・地域全体の幸福感が上昇する**。

こどもの誕生前から幼児期までの「こどもの育ちの基本的な考え方」

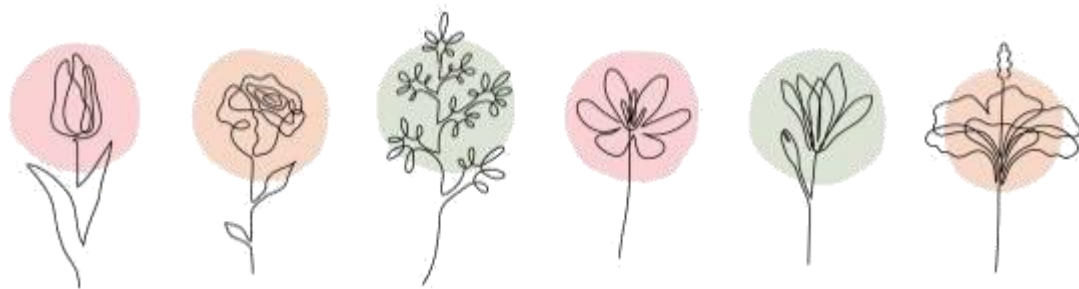
こどもの育ちに係る他の指針等とあいまって、全てのこどもに、身体、心、社会(環境)の全ての面での育ちを一体として保障するために育ちの時期を問わず全ての人と共有したい基本的な考え方



- これまで、乳幼児期の愛着（アタッチメント）の正しい理解やその育ちのプロセスにおける重要性に関し、全ての人と分かりやすく共有できていなかった。
- 乳幼児期に**安心と挑戦の循環を保障するための考え方を、全ての人と分かりやすく共有**することで、全ての人に関わりが、より良いこどもの育ちへつながり、こどもの発達を保障していく。

- これまで、こどもを真ん中に考えたときに、直接的、間接的あるいはその両方で、こどもの誕生前から幼児期まで、全ての人と具体的などのような立ち位置で、こどもを支える当事者となりうるのかが見える化できていなかった。
- 「こどもまんなか」視点で共有したいことを分かりやすく整理することで、**全ての人と当事者**となり、「こどもまんなか」という一貫した考え方の下でこどもの育ちを保障していく。

4. まとめ



【少子化対策としての幼児教育・保育の役割】

- **子どもの自己肯定感が向上する保育実践の周知**
 - * 教師・保育者主導の「昭和型の保育」からの脱却
 - 「21世紀型の幼児教育・保育」「子どもの主体性を尊重する保育」のさらなる周知及び研修の機会の充実
 - * 子どもの人権擁護
 - 「不適切保育」の改善・撤廃と保育者の働き方改革促進
- **地域のコミュニティの拠点づくり**
 - * さまざまな家庭環境に寄り添い、「困り感」に対応できる支援の仕組みづくり
 - * それぞれが主体となる支援体制の構築とさらなる支援の充実

【自治体の役割】

- 地域の実情に応じながら、地域に寄り添ったきめ細やかな支援の徹底とさらなる支援の充実
- 地域の魅力発信のさらなる継続と、移住・定住者へのアプローチ
（「保育園留学」の留学先の園との連携など）

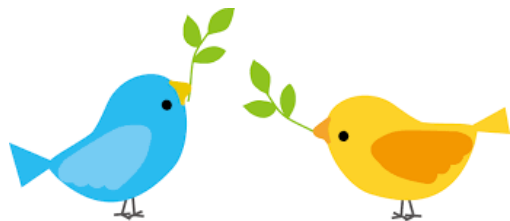
【企業・事業者の役割】

- 子育て世帯への理解と働き方改革の促進
- 企業間、事業主間での独自の子育て支援策の共有

【情報発信】

- 県民（特に若者）に向けて、出逢い・結婚 → 妊娠・出産 → 子育てに希望がもてるような魅力発信
（メディア戦略：コマーシャルやSNSを活用、イベント企画のさらなる情報発信）

一人ひとりの若者が、出逢い・結婚、妊娠・出産、子育て、
教育・保育についての**“希望”**がもてること、
そして故郷宮崎県で安心して第1子を生み、育てるなかで
“子育ての幸福感”が得られること、
このことが、さらに第2子、第3子を生み育てようという
気持ちにつながること、
そのためには、**子どもが主体となる教育・保育**を
少子化対策の最前線と位置づけ、
子どもも保護者も自己肯定感・幸福感が上昇し、
地域が一体となった切れ目のない支援が“実現”できるよう、
さらなる少子化対策の具現化を要望します



ご清聴ありがとうございました